

みやぎ

仕事人 列伝

未来企画

仙台市

福井 大輔さん(37)

交流促す「ごった煮」施設



仙台「四方よし」企業大賞
Sendai "Yoshiyoshi" Corporate Award



未来企画が運営する複合施設「アンダンチ」。地域共生の先進例として、全国から視察者が絶えない＝仙台市若林区なないろの里



ふくい・だいすけ 1983年、塩釜市生まれ。早稲田大スポーツ科学部卒。住友商事東北勤務を経て2013年10月、義父が興した未来企画の代表に就任。18年、若林区なないろの里に「アンダンチ」をオープンさせた。20年7月から仙台市認知症対策推進会議委員。宮城野区で妻、2男2女の6人暮らし。

地元経済界で注目を集める経営者に自身の歩みや心構えなどを聞くシリーズ。今回は2019年度「仙台『四方よし』企業大賞」大賞を受賞した「未来企画」（仙台市）代表の福井大輔さん（37）にフォーカスします。

◇
2018年夏、若林区なないろの里に開いた複合施設「アンダンチ」の運営が社業の核だ。

約3300平方メートルの敷地に高齢者住宅、介護事業所、日本食レストラン、保育園、障害者就労の五つを「ごった煮」（福井さん）にした施設。庭では2頭のヤギを飼い、入居の高齢者や保育園児らはもちろん、飲食店の客らも寄ってきて一緒に

なっていて。

それだけではない。高齢者住宅の入り口には駄菓子屋があり、近所の子らが入り出す。店員役は障害者施設の利用者が務め、そのやりとりに時折、お年寄りも関わって。そんな縦横無尽の人と人との交流が、アンダンチの日常だ。

「目指したのは現代の『長屋』です。多様な立場の人が関わりを持ちながら、互いの役割を認め合って暮らす。そんな地域共生の実践です」。新型コロナウイルス感染症の拡大で交流を控えざるを得ない局面はあるものの、地元の方で「あ

たなの家」を意味する「あんだん家（ち）」をもじった理念を地で行く。

そもそも福祉や保育は門外漢だった。転機は10年の結婚。腎臓内科医である義父から「患者さんが老いても安心して暮らせる終の棲家（ついのすみか）づくりをやらないか」と打診され、一念発起。持ち前の向学心で知見を深め、先進地にも足を運んで理想形を追求。一つの場所に複数の役割や意義を重ね合わせる今の姿にたどり着いた。

「5人に1人が認知症になる時代と言われても、多くの人にとっては人ごと。

障害者のことも同様です。まずは『接点』を持つことが、興味の一歩。なので多くの接点生まれるように、ごった煮にしているのです。小さな関わりの積み重ねの先に、社会の変化を願う。

スタッフはパートを含めて136人。介護福祉士、看護師、保育士、理学療法士

など多様な有資格者が集い、持ち場を超えて支え合う。その象徴が保育園。定員19人のうち職員の子が7人を占め、職員の安定的な採用や定着を後押しする。加えてオープン以来、子連れ出勤もOK。四方よし企業大賞に輝いただけあって、スタッフにとっても「あんだん家」だ。

互いの役割を認め合って暮らす地域共生を実践